

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

### 心が育つ／幸田町立大草保育園

乳幼児期の子どもの「心を育む」ためには、どのようなことを大切にして子どもたちと関わっていったらいいでしょうか？  
この事例は、「葉っぱが食べられている」と3歳児が気付いたことがきっかけになっています。どこにでもある場面が、子どもたちの好奇心、探求心を揺さぶります。自然との関わりを深め、広めていく子どもたちには、“温かな心”が育まれています。「科学する心」を捉えることができます。



### ○ “ハテナの心”で広がった／3歳児

※ 【】 は分析

#### ✦ 事例1：誰が食べたの？

1月のある日、3歳児の保育室前のブロッコリーの葉が食べられていた。「先生、葉っぱ食べられてる」「誰が食べた？」と、子どもたちの“ハテナの心”が動く。子どもたちは保育者と一緒に、葉やブロッコリーの実を調べる。保育者が言った「青虫かな？」という言葉に、子どもたちは目をキラキラさせて葉を裏返し、必死に虫を探すが見付からない。

数日後、保育室でおやつを食べている時、「先生、ブロッコリー、鳥さんが食べてるよ」とAちゃん。窓越しに、数羽の鳥がブロッコリーの葉に群がっているのを見つけた。【見て】

「えっ、鳥？」「本当だ。鳥が食べてたんだね」「鳥さんもおやつの時間」「かわいいね」自然と笑いが起こる。

Bちゃんが「お名前は何？」【感じて】と言う

「そうだね。調べてみよう」と、保育者は窓越しに写真を撮り、子どもたちと鳥図鑑を見て、ヒヨドリだと判明した。【発見】

その後、イチゴハウスに入りイチゴを食べているヒヨドリを見つけた。

「大変。閉じ込められちゃった」「助けなきゃ」  
「ヒヨドリさん、イチゴ食べた」うふふと笑うKちゃん。  
Hちゃん「イチゴ好きなのかな？」



#### ✦ 事例2：ご飯をあげたい

その後何度も、窓越しにヒヨドリを確認。子どもたちも「ヒヨドリさん、また来たよ」と楽しみにするようになる。が、子どもたちが窓に寄ると逃げてしまう。「ご飯、あげたいな」と、いろいろな本で調べる。

ミカンを食べている鳥を見付け、「先生、ミカンあげたい」【感じて】

子どもたちがヒヨドリをもっと身近に感じる方法を試案していた保育者は、子どもからの提案を「いいね」と受け入れた。

保育者がどこに置かか問いかけると、「ブロッコリーの所」「木とかは？」などと声があり、ブロッコリーの葉の上と木の枝にミカンを置いた。

次の日登園すると、「ミカン食べたかな？」興味津々ミカンを見に行く。ミカンがない。



「あれ？食べたのかな？」よく探すと、ミカンの残骸がブロッコリーの葉の陰に落ちていた。皮のみ残り、中の実はなかったのを見て、「ミカン食べたね。皮だけになってるじゃん」ミカン自体ないことも見て、「ない」「ミカンがない。皮も食べちゃった」【発見】おなかすいてるんだね」「ミカン、美味しそうだから…」「きっと、夜に食べた」保育者が「へー。なんで？」と言うと、「だって、みんながないから」【感じて】

### ✦ 事例3：餌台作り（3歳児）

ヒヨドリが餌を食べることを楽しむ3歳児たちは、餌台を作ることに挑戦。地域の方に提供して頂いた間伐材を利用して餌台を作る。

「固いね」「頑張るぞ」などと言いながら、代わる代わるノコギリで切る。【触れて】

4、5歳児が使っているノコギリが使えるとあって、張り切っている。興味をもった5歳児が集まって来て「何やってる？」と言うと、Rちゃん「鳥の餌」Aちゃん「ヒヨドリさんの餌を入れるやつ作ってるんだよ」と答える。

※5歳児は巣箱作りをする



### ✦ 事例4：ヒヨドリさんが来た（3歳児）

餌を置き始めて、50日余り。

とうとうヒヨドリが餌台に止まり、ミカンをついばむ姿を目撃することができた。この日まで忍耐だった。ヒヨドリがミカンをついばむと、ミカンの汁が、ピューと飛んだ。その汁まで窓越しに見えた。【見て】

子どもたちは「ヒヨドリさんが来たあー」ととても、嬉しそう。「ミカンがピューと飛んだ」と興奮気味に話てる。「しー」慌てて、人差し指を口の前に出す。子どもたちは静かになる。うるさく騒ぐと逃げてしまうと分かった3歳児は、じーっとよく観察する。【見て】

Aちゃん「昨日、Aね夢みたの。ヒヨドリさんが出てきたんだ」うふふと笑う。Dちゃんは餌台から落ちたミカン拾い、砂が付いていたら食べられないだろうと水で洗い、餌台に戻して「砂が付いてたから洗っといた」と言う。【優しさ】

この日を境に、ヒヨドリの警戒心が和らいだのか、餌台に止まるヒヨドリを見る機会が増えた。



### ✦ 考察

姿は見えぬが、餌台に置いた餌はいつも食べられていた。とうとうヒヨドリが餌台に止まり、ミカンを食べる姿を見た。「たぶん・・だろう」が確信になった。長い道のりだった。餌台の餌を食べるヒヨドリを目撃したことは、3歳児にとって、とても嬉しいことだった。ヒヨドリがより身近になり、餌代の餌置きにも俄然やる気が芽生えただろう。3歳児が自分で家族に話し、ミカンを持ってきた。砂がついていたら嫌だろうと、ヒヨドリの気持ちを考えて落ちたミカンを洗った。優しい気持ちが育っていく。

無断転載を禁ず。引用する場合は下記を必ず明記願います。

「(C)公益財団法人 ソニー教育財団

ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」